

令和 3 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23115

研究課題名(和文) エジプト中王国時代における装身具のカテゴリと葬送儀礼行為の研究

研究課題名(英文) Performance of Funerary Ritual in the Middle Kingdom of Egypt: Use of jewelry in Funerary Contexts

研究代表者

山崎 世理愛 (YAMAZAKI, Seria)

早稲田大学・文学大学院・助手

研究者番号：50844164

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：エジプト中王国時代のオブジェクト・フリーズ(棺装飾)に表された装身具の分析から、理想的な副葬装身具の組み合わせを抽出し、実際に装身具が出土した埋葬との比較を行なった。結果、特定の装身具セットが葬送において重要視されたが、実際にそれらを副葬できたのは限られた人々のみであることが分かった。また、実際の埋葬では装身具の種類によって異なる副葬配置がなされ、オブジェクト・フリーズに頻繁に描かれた理想的な装身具セットは特に被葬者の身体近くに副葬されていた。さらに、装身具の組成・配置・棺やミイラマスクにおける描写を総合的に検討した結果、被葬者へ繰り返し装身具を捧げることが意図された埋葬空間が形成されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで古代エジプトの装身具は、その精巧な作りや高い芸術性で知られている一方、当時どのような意図のもと副葬されたのかなど、利用に関する具体的な背景は不明確な点が多かった。このような中で本研究は、葬送儀礼に際する装身具利用の理想と実態、装身具を用いた儀礼空間の構造など、装身具が持つ身を飾るといふ以上の側面を明らかにした。本研究は先駆的な古代エジプトの装身具研究として位置付けられるとともに、見た目の美しさだけでなく、古代エジプトの装身具が当時の社会や文化を一層具体的に復元し得る重要な文化資源であることを改めて強調できたという点でも意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reconstruct the categorization of Ancient Egyptian jewelry through analysis of the object friezes and compare with archaeological findings to shed light on actual practices in the Middle Kingdom. Upon analyzing object friezes, it became clear that certain kinds of jewelry were regarded as particularly important. In reality, jewelry similar to the items in the object friezes were not frequently buried with the deceased though many other pieces of jewelry that almost never appeared in object friezes were used. Their placement in the tombs revealed that the ideal jewelry shown in the object friezes were placed close to the deceased and other kinds of jewelry pieces were sometimes placed even outside coffins. Furthermore, analysis of the assemblage, placement, and depiction of jewelry in the tombs suggested that offering jewelry to the deceased was planned to be repeated. The repetition of the object offering ritual was strategically incorporated into the funeral.

研究分野：エジプト学

キーワード：古代エジプト 中王国時代 副葬品 装身具 棺装飾 葬送儀礼 器物奉獻儀礼

1. 研究開始当初の背景

古代エジプトでは、様々な装身具が副葬品として利用され、特に中王国時代にはその種類・デザインが増加するとともに、より幅広い人々の墓に副葬されるようになる。また、装身具は葬送に際して食べ物以外のものを被葬者に捧げる器物奉獻儀礼に含まれる主要な品目であった。しかし、これまでは装身具の製作技術などに関する分析が中心で、装身具を用いた葬送儀礼行為やその背景を追究する研究は積極的に行われてこなかった。

この状況から脱却し、装身具を通して当時の葬送文化を解明するには、まず装身具が当時どのように認識・分類されていたのかという点を可能な限り復元する必要がある。オブジェクト・フリーズと呼ばれる棺装飾には多数の装身具を含む器物奉獻儀礼に用いられる器物が描かれており、図像とともにしばしば器物の名称や素材などが記された文字ラベル(銘文)が付される。したがって、図像と文字ラベルを体系的に分析することで、当時の装身具に対する分類の一端が見られる可能性がある。また、オブジェクト・フリーズに描かれた装身具の組み合わせや棺上の配置・描写方法の分析からは、装身具を用いた理想的な器物奉獻儀礼の在り方を復元することができる。さらに、こうした装身具に対する当時の分類体系や儀礼における理想的な利用を踏まえた上で、実際に装身具が出土した埋葬との比較をすれば、中王国時代における装身具を用いた葬送儀礼の実態や理想との乖離状況、その背景の解明が可能となる。そこで本研究では、棺に描かれたオブジェクト・フリーズと実際の考古資料という大きく2種類の資料を対象に、エジプト中王国時代の葬送における装身具の儀礼利用の様相を追究することとした。

2. 研究の目的

エジプト中王国時代の副葬品研究では、副葬品の組成やそれらの墓内における配置に特定のパターンを見出し、当時の葬送文化について様々な考察がなされている。特に、供物儀礼の一つである食糧奉獻儀礼と関わる土器に関しては、考古資料および文字資料の分析から一定の規則性が抽出され、土器を用いた葬送儀礼行為が明らかにされてきた。そのような中、装身具に関しては上述の通り研究の蓄積が乏しい状況にあり、副葬品研究で扱われる場合には「装身具」と一括にされ詳細な分析は行われていない。しかしながら、装身具は器物奉獻儀礼に属する主要な品目であり、土器と同様にその副葬行為には儀礼や思想的背景と関わる何らかのパターンがあったと考えられる。以上より本研究では、エジプト中王国時代における装身具が用いられた器物奉獻儀礼を構造化している要因、およびその行為の実態を理想と現実の比較という観点から解明することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) オブジェクト・フリーズの分析

83 点の棺に描かれたオブジェクト・フリーズを集成し、それらに描かれた器物について図像の同定と文字ラベルの判読を行なった結果、1,953 点が資料化された。この中から、特に図 1 に示した装身具類を抽出し、他の器物の描写との比較もしながら棺上における描写傾向を分析した。また、当時の視点から装身具に対する分類を復元するため、同種類の装身具に関する図像表現と文字ラベル内容の組み合わせを精査した。なお、当該期の棺はオブジェクト・フリーズが描かれる側面によって2つのタイプに分けられることが分かっており、早期のタイプ1とそれを取って代わるタイプ2がある。したがって、分析ではタイプ差(=時期差)を考慮し、装身具の描写方法に見られる変化についても分析した。

襟飾り	襟飾り用 錠	(幅広) 腕輪	(幅広) 足輪	赤色樽形 ビーズ	緑色 円筒形 ビーズ	^c dnt	h3drt	メナト 首飾り	シストラム	護符付き 一連ビーズ	一連 ビーズ	ライオン 前部形護符	sn	アंक
														

図 1. オブジェクト・フリーズに描かれた装身具の種類

(2) 考古資料の分析

装身具が出土した 400 基以上の埋葬を対象に、各種類の出土傾向を分析し、地域や社会階層による違いを確認した。さらに本研究の軸となる分析として、未盗掘やそれに近い王族と非王族の埋葬を対象に、副葬された装身具の組成とその配置を分析し、パターンの抽出を試みた。考察段階においてはオブジェクト・フリーズとの比較も行い、理想との乖離状況やその背景について当時の社会および思想の双方から検討した。

4. 研究成果

(1) 装身具を用いた理想的な器物奉献儀礼

オブジェクト・フリーズの分析から、装身具は食べ物以外の器物奉献儀礼において主要な供物として位置付けられ、特定の装身具セット（襟飾り、腕輪・足環、赤色樽形ビーズ）がその理想として頻りに描かれていることが判明した。時期による差異としては、装身具の細部における画像表現に違いが見られたが、その他の器物とは異なり、特定の装身具セットが頻りに描写されるという点には変化が見られなかった。ただし、描写側面が増えるタイプ2では、重層的・相互補完的な表現が装身具の描写位置によってなされていた（図2）。また、一見全く同じ画像の装身具であっても文字ラベル内容が異なっていることもあり、現代の視点からでは捉えきれない当時の分類についても一部明らかにすることが出来た。

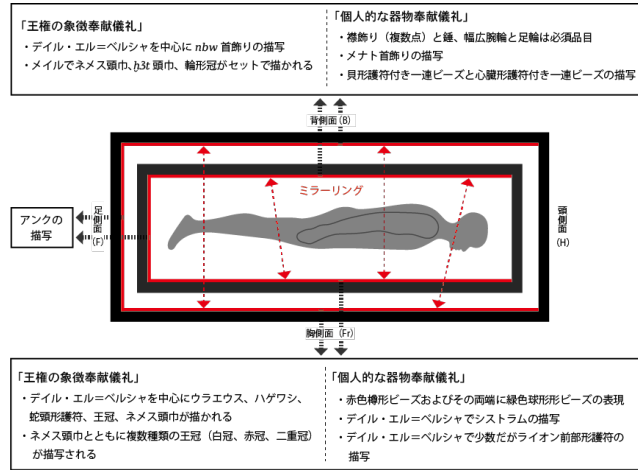


図2. タイプ2のオブジェクト・フリーズにおける装身具の描写傾向を表す概念図

(2) 実際の出土傾向と理想からの乖離—社会的背景—

オブジェクト・フリーズに描かれた理想的な装身具セットの実物は、実際にはごく僅かな墓からのみ出土していることが分かった。たとえば襟飾りに関しては、エジプト全土から出土した棺のオブジェクト・フリーズに必須品目として描かれていたのに対して、考古遺物としては中心地のメンフィス・ファイユーム地域からの出土に集中していた（図3）。また、王族以外の埋葬ではファイアンス製が主であったが、王族墓から出土したものには金や多種類の準貴石が用いられているという違いも見られた。一方、オブジェクト・フリーズに描かれないあるいは描写頻度の低い装身具に関しては、地域や被葬者の社会的地位に関係なく頻りに出土する傾向が看取された。そして、社会的地位のさほど高くない被葬者の装身具であっても高価な素材が用いられていた。

中王国時代は、高価な素材が幅広い社会階層の副葬品として用いられていることから、ある程度の自由が認められた社会であると言われてきた。しかし、装身具の分析からは、素材だけでなくそのものが持つ儀器としての価値を考慮する必要性が示された。つまり、器物奉献儀礼で重要視されるような特定の装身具に関しては、所有の可否や異なる素材という点で社会階層による差別化が図られていたのである。ある程度の自由を認めながらも、理想的な特定の儀礼行為には規制を設け、王族やエリート間の紐帯強化といった中央集権を維持するための戦略性が窺える。

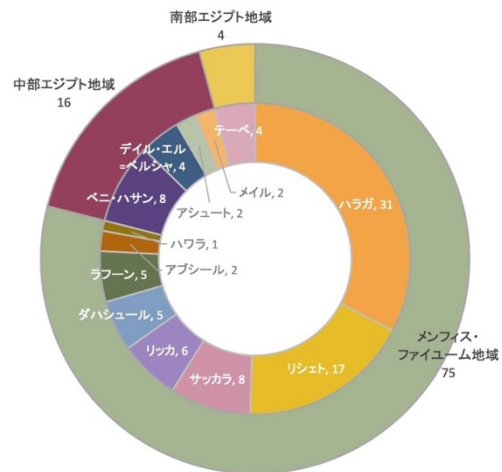


図3. 地域・遺跡別の襟飾り出土墓数

(3) 装身具を用いた葬送儀礼行為—思想的背景—

王族・非王族墓双方では、装身具の種類によって副葬配置に異なる傾向が見られることが判明した。具体的には、オブジェクト・フリーズに頻りに描かれた理想的な副葬装身具ほど被葬者の身体に近い位置に置かれる傾向が見られた。それはミイラ包み内における複数の層あるいは棺内・棺外という配置関係によって表されていた。こういった配置の差別化には、当時の装身具に対するカテゴリの一端が反映されていると考えられる（図4）。ウアフという男性のミイラ包みでは、オブジェクト・フリーズに頻りに描かれた装身具セットが最も被葬者の身体に近い層に入れられ、次に描写頻度の低い装身具類が入れられたが、両グループ間はミイラ布だけでなく樹脂によっても隔たれていた。これは、装身具の種類によって分類されていたことを補強する例として位置付けられる。

また、儀礼行為という観点から考えてみると、器物奉献儀礼を表したオブジェクト・フリーズ

において理想と位置付けられた装身具セットから順に被葬者へ捧げられたことが分かる。供物儀礼は、ものや身体を清めた後に奉獻が行われるが、上述のウアップの例で述べた樹脂は被葬者の身体を清める意味合いを持つと考えられる。つまり、最も重要な装身具が被葬者に捧げられた後、身体が改めて清められ、さらなる装身具の奉獻が行われたのである。これは、被葬者の身体上で器物奉獻儀礼が繰り返し行われたことを意味している。また、ミイラマスクには襟飾りと赤色樽形ビーズの首飾りが必須品目として頻繁に描かれていることから、実物と相伴している場合には、そこでも反復的な関係性が形成されていた可能性が考えられる。そして、上述の通りオブジェクト・フリーズにおいても重層的な描写がされる傾向が見られた。

装身具の奉獻（器物奉獻儀礼）は葬送に際して一度のみ執行されるが、宗教文書には埋葬・葬送儀礼を繰り返し行うことで死者の再生・復活を永続することが示されている。つまり、装身具の奉獻儀礼も繰り返す必要が出てくる。しかし実際には被葬者を埋葬してからでは不可能であるため、装身具の配置や図像表現といった方法を用いて、装身具奉獻を繰り返し得る埋葬空間を形作ったのではないかと考えられる。こういった反復性は、装身具以外の器物奉獻儀礼にも見られ、やはり図像表現や副葬配置によって同様に表されていた。

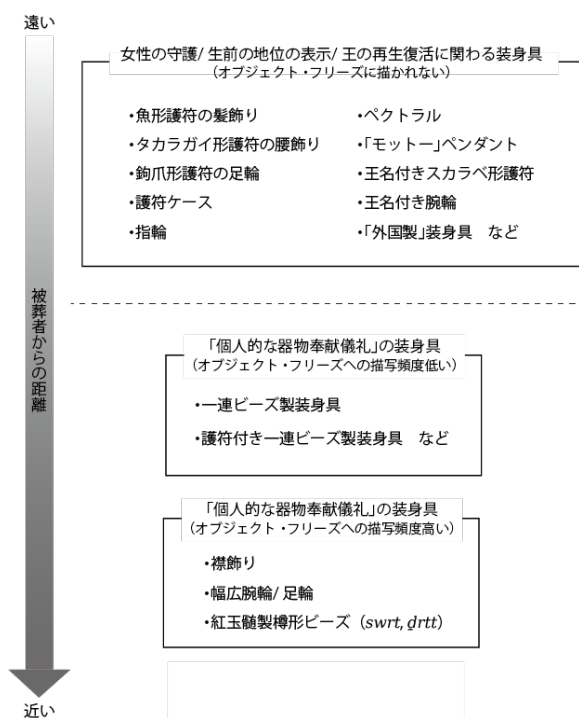


図4. 葬送における装身具のカテゴリを示した概念

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山崎世理愛	4. 巻 182
2. 論文標題 エジプト中王国時代における赤色樽形ビーズの分類と利用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史観	6. 最初と最後の頁 86-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎世理愛	4. 巻 2020-5
2. 論文標題 古代エジプトにおける装身具の葬送利用（考古アカデミックレポート）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 30-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山崎世理愛
2. 発表標題 “Adorning the Deceased: Middle Kingdom Jewellery in Object Friezes and in Reality”
3. 学会等名 International Congress for Young Egyptologists（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎世理愛
2. 発表標題 オブジェクト・フリーズにみるエジプト中王国時代の葬送儀礼と実際の儀礼行為
3. 学会等名 日本オリエント学会第 61 回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎世理愛
2. 発表標題 エジプト中王国時代における副葬装身具のカテゴリと儀礼行為の復元
3. 学会等名 早稲田大学考古学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

博士論文「エジプト中王国時代における葬送儀礼の実践と展開：棺の装飾と考古資料からみた器物奉獻儀礼」（2021年2月）

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関